

# 第1章 ニットの概要

一口に、ニットといっても全容を正確に端的に説明するのは、なかなか、むずかしいことである。現在、ニットアパレルは単なるインナー、単品、洋品的な扱いから脱して、世界的なファッションの中で重要な地位を占めるようになっており、単純に織物と編物という区分けを超越して、デザイナーにとって非常に“魅力的な素材やテクニク”の一つとして創造（クリエイション）の世界に貢献している。

しかし、ニットのモノづくりという切口で考えてみると、そこには、ニット独特の専門的な知識や技術が要求されるのが事実である。

この章では、よりハイレベルで時代性のあるニットアパレルを企画するために、担当者が知らなければならない全般的な知識について、編成方法や商品化形態からの分類、特性や品種、ニットの小史に至るまでを説明している。

さらに詳しい基礎知識を学ぶ上で役立つ、「ニットの入門の章」である。

## 1-1 ニットとは

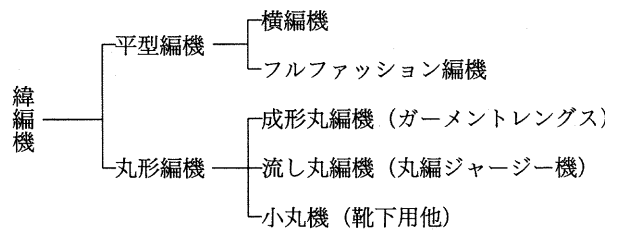
ニット (KNIT) とは、英語で「編む」という意味であるが、また同時に「編まれたもの」すなわち「ニット・グッズ」(KNIT GOODS) を略して、いっている場合もある。

ニットは、わが国では16世紀頃から「メリヤス」といわれてきたが、これはスペイン語の「メディアス」(MEDIAS)、またはポルトガル語の「メイアス」(MEIAS) がなまったものとされている。これらの言葉は、いずれも靴下の意味を持っているが、それはニットが用いられはじめたころ、靴下がその主要商品であったことと関連している。

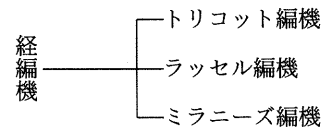
織物とニットを比較してみると、織物がたて方向とよこ方向の2方向からの糸の交差によってつくられるのに対し、ニットはよこ、またはたての、いずれか1方向の糸を用い、ループ（編み目）を連続させることによってつくられている。

この場合、ニットではよこ方向の糸によってつくられるものを緯編（よこあみ）といい、たて方向の糸によってつくられるものを経編（たてあみ）といっている。

緯編式はループが横方向に連続してつくられていく方式で、次の機種がある。



経編式は整経糸を用い、ループが縦方向に連続してつくられていく方式で、次の機種がある。



## 1-2 ニットの特性と品種

### (1) ニットの特性 (図表 2-1)

ニットは、ループの連なりによってつくられているために次のような多くの特性を持っている。

#### ① 伸縮性

ニットは伸縮性があり、衣料として着脱がしやすく、運動機能性がよい。

#### ② 柔軟性

ソフトな感触があり、体によくなじみ、着心地がよ

く、着ていて疲れにくい。

### ③ 保温性

ループのふくらみで含気性があるために着ていて暖かい。また同時に、通気性もある。

### ④ ドレープ性

着用した場合に、突っばらずに下に垂れる性質がある。

### ⑤ 成形性

ニットは糸の状態から、商品化することができるが、その場合、ループの数を増減することによって、編み幅を変えるとこの成形編(ファッションング)ができる。

### ⑥ 編目のほつれ

裁断したところがほつれやすい。

⑦ カジュアル性、クラフト性、感覚的なカジュアル性があり、ニット独特の工芸的な味わいが表現できる。テキスタイル段階から企画できるのでオリジナル性が高い。

以上のように、ニットにはさまざまな特性があるが、長所を生かし、短所をどのように修正していくかが重要である。特に、用途に応じた編地設計や、縫製の場合のディテール(細部)の始末の方法など、注意する点が多い。

## (2) ニットの品種

ニットの品種として、次のようなものがある。

そのうち、ニットアパレル(ニットの外衣)には次のようなものがある。

### ① セーター類

セーターは、ニットのプルオーバーであり、頭からかぶって着用する方式のものをいう。

セーターの語源は「スエット」(Sweat)からきたものとされている。「スエット」とは「汗」のことであるが、セーター(Sweater)は、汗をかくものということで、スポーツマンが汗とり用に着用するものについて言われた。

今日、セーターはスポーツウエアからタウンウエアなどの広い用途に渡って着用され、スタイルも多彩でファッション表現になくはならないものになっている。

### ② ニット・アウターシャツ、ブラウス類

Tシャツやヘンリーネック・シャツなど従来は下着として用いられていたものが、アウター用として用いられるようになってきている。また、ポロシャツはスポーツ用から一般カジュアル用に幅広く用いられてきた。

一方で、ブラウス・イメージのものが、ニット生地

図表 2-1 ニットの特長

	性 質	特 長
編地	<ul style="list-style-type: none"> <li>伸縮性</li> <li>柔軟性</li> <li>保温性</li> <li>ドレープ性</li> </ul>	<p>商品にした時、着脱がしやすく、運動機能性に優れている。</p> <p>感触がソフトで体によくなじみ、着ごちがよい。</p> <p>ループのふくらみで含気性があるため暖かい。</p> <p>同時に通気性もあり、健康的。</p> <p>着用時、張り感よりも下に垂れ下がる性質が強い。</p>
製造面	<ul style="list-style-type: none"> <li>成形編</li> <li>編目のほつれ</li> </ul>	<p>一定の形に合わせて、ループ(編目)の数を増減することにより、編み幅を変えて成形編(ファッションング)をすることができる。リンクング主力の仕上げで、すっきりと機能的な商品になる。</p> <p>一本の糸の連続であるため、裁断面からのほつれが広範囲に及ぶおそれがある。十分な始末が必要。</p>
イメージ	<ul style="list-style-type: none"> <li>カジュアル性</li> <li>クラフト性</li> <li>オリジナル性</li> </ul>	<p>感覚的なカジュアル性があり、ニット独特の工芸的な味わいが表現できる。</p> <p>テキスタイルの段階から企画できるので、オリジナル性の表現も容易である。</p>

によって作られるようになった。

ニットによるシャツやブラウス類は、1960年代のヤングファッションの台頭と、スポーツ・カジュアル全盛ムードに乗って急速に伸展してきたものである。

③ ニットスーツ、ドレス類

ニットによる上下組合せのスーツ類やワンピースまたはトップス（ジャケット類）およびボトムス（スカート、パンツ）のそれぞれ単品商品がニットによって作られてきた。1960年代の半ばから、ミラノリブというスーツ向きの編地が人気となり、これがニットスーツの製作に拍車をかけたといえよう。

現在ニットスーツ、ワンピース類は、ニットの持ち味を生かし、またニットの欠点を補いながら各種さまざまなものが作られている。立体パターンを使用したものも多く、身頃の編地とディテール（細部）の始末のよしあしも商品のできばえに大きく影響する。

1-3 ニットアパレルの範囲

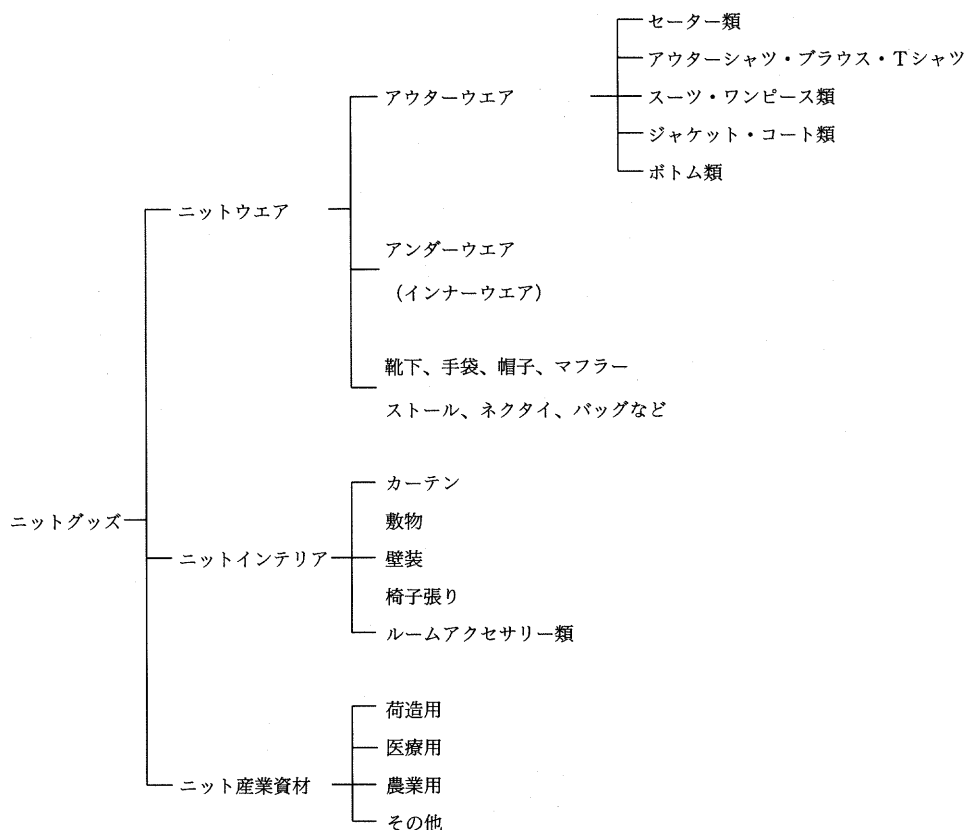
アパレルとは衣服や服装の意味であり、ニット・ア

パレルはニットでつくられた衣服ということである。

現代社会において、ファッションは生活に欠かせないものになっているが、かつては、ファッションイコール衣服を指していた。しかし、今ではアクセサリ、ヘア・スタイル、化粧、香水など身体を飾るものはもとより、インテリア、寝具、家具、家庭電器、食器、厨房器具、トイレタリー、住宅など住空間にまつわるもの、さらに車、スポーツ、レジャー、旅行、ホテルやレストランでの食事などのコミュニティや人間の行動にまつわるもの、つまり生活にかかわるものすべてがファッションの一環とみなされるようになってきている。

その中でニットアパレルの範囲を考えると、今日的なファッションのとらえ方では、身につけるものすべてに拡大解釈することもできるが、中心はニット外衣（アウトターウェア）ということになる。ニットアパレルは織物と全く異なる構造を持ち、織物では得られない親しみやすいソフトな感覚、また人間が本来望んでいるような自由なカジュアル性、さらに多彩で魅力的な表現力を持っている。それが人々の共感を得て、

図表 2-2 ニットの品種



ファッションの中で重要な地位を占めるようになったのである。

#### 1-4 ニットアパレルの新潮流

ニットが実際の生活に入りこんできたのは、西暦4世紀のエジプトである。そのころニットは遊牧民の履くサンダルのための下履き、つまり靴下として登場した。

ニットがセーターを主体とするアウターウェアとして登場したのは、10世紀であり、スコットランド東の北海に浮かぶフェア・アイルを起点として、ノルウェー海盆からアイスランド周辺の島々、およびアイスランド西側の北大西洋上の島々（アラン島）や英仏海峡の島々（ジャージー島、ガーンジー島）である。それらは今日、フィッシャーマン・ニットと総称されている。これらはウールのハンド・ニットで、その多くは強縮絨をして、船上で漁師が作業する時、水に強く、寒さをしのぐことができるように考えられていた。

ニットにファッション性が加わるようになったのは20世紀に入ってからである。

ニットは、パリで1914年に婦人服の店を開いたガブリエル・シャネル（ココ・シャネル）によって注目され、後にオートクチュールにとりあげられたシャネル・スーツによって、大きくファッション線の上に浮かび上がったといえよう。

ニットはその後、1969年にセーヌ左岸にプレタポルテの店を開いたソニヤ・リキエルによって自由な発想でデザインされ、シックな街着としてさらに伸展した。

一方ミラノのミッソーニは、オッタビオ・ミッソーニとロジータ・ミッソーニのコンビでニット工場をつくり、1966年にミラノでニット中心のコレクションを成功させ、ニットの魔術師とも職人ともいわれている。特に前衛的な新しい発想のジャカード・デザインに才能を示し、アート性豊かな、フレッシュなニット・ファッションの創作活動を続けている。

さらに、ミラノでは、動物柄のニットに代表されるクリツィアのマウリッチア・マンデッリや、布帛や革などの異素材とニットとのコンビネーションを大胆かつ、巧みに表現するジャン・フランコ・フェレなど

多くのデザイナーが、世界のトップクラスのニット・ファッションを創作している。

一方、ニットの編機ではメカトロニクスの技術が急速に進み、これによって現代ニットファッションの中に新しい魅力要素を注入することとなった。

ニットの技術革新を示す重要な展示会として、国際繊維機械展（ITMA）があり、年に1回のペースでヨーロッパ各都市持ち回りで開催されているが、1963年の展示会で西ドイツのモラト社が、丸編機によるコンピュータ・ニットの「モラトロニック」というモデルをはじめて発表した。

続いて1975年の展示会では、同じく西ドイツのストール社が横編機によるコンピュータ・ニットの「ストールANV」というモデルを発表した。

ニットはコンピュータ・ニット時代に入り、これによって、今まで考えられなかった柄と柄の組み合わせや、リピートのない柄、また1枚のセーターやドレスを意識してレイアウトするエンジニヤード・パターンなどが容易となった。また編機以外でもパターンメイキングのためのCAD、CAMのマシンが整備され、ニットの生産方式は一新された。

さらに、1975年の展示会では、英国のコートルーズ社が「プレッサー・フット」と称する横編機のアタッチメントを発明し、会場ではスイスの横編機として有名な「デュピエ」などにとりつけて発表され、これもコンピュータ・ニットの発明同様にセンセーションを巻き起こした。

この「プレッサー・フット」を横編機のキャリッジに取り付けることによって、今まで問題があったファッションングの完全化が成功し、全く新しい編地の開発と、さらに、これを立体的に構成して編成し商品化をするというインテグラル・ニットが可能となり、これによって新しいファッション商品が生み出されて話題をまいている。

次に、機械のゲージについては、コースゲージにおいて3ゲージまでのジャカード万能機や2ゲージまでのリンクス・アンド・リンクス・マシーンなど、また、ファインゲージではダブル・ニットにおいて42ゲージまでのインターロック・マシーンが作られた。

このことは、コースゲージにおいては、自動機が手

編ニットの領域にまで入り込み、しかもコンピュータによるシングルからダブル・ニットまでの無限の可能性に挑戦することになった。

またファインゲージでは、シースルー・ニットの新しいファッション商品が可能となった。

一方、ニット用素材の改良と開発が進み、ニットの各ゲージに適合する各種のデザイン糸や、ハイテク素材、細番手でありながら丈夫で伸度のあるものなどがつくられ、また交編用の各種組み合わせ糸などが用意され、個性的で、魅力のあるファッションの創作が、いっそう可能となったのである。

ニットは今日、いわゆるセーター中心の概念から幅を広げ、ジャケット、コート、ドレス、そしてスーツの分野などにも進出し、トータル・ファッションとして、デザイナーの発想を尊重するクリエイティブなニット・ウェア時代へ移行してきている。そのためニットは、スポーツウェアやカジュアルウェアとして取り上げられていた時代から、さらに枠を広げ、タウンウェア、そしてフォーマルウェアなど幅広い分野で重要な位置を占めるようになってきている。

今日のニット・アパレルにおいては、シルエットの表現も非常に重要な要素になっている。素材、編組織だけではなく、シルエットの斬新さがプラスされていく傾向が強まっている。ニットは本来、伸縮性や柔軟性、ドレープ性など、シルエットの形成にはむずかしい多くの特性を持っているが、こうしたニットの特性を十分に考慮した上で、織物では表現できない、ニット特有のテキスタイルを使用した、ニット・ファッションを創造していくことが、今後、最も重要視される時代にきている。

## 1-5 ニットの種類

ニットはインナーウェア、中衣、外衣、靴下、手袋といった衣料から、寝装品、インテリア、産業資材などの非衣料まで幅広い用途に使われている。

このようなニット商品がどういう編み方で編地となり、商品化されるかを示したのが図表2-3で、編機によって、できる編地のタイプや特性が異なり、それに応じた商品化の方法と商品展開がなされている。

### 1-5-1 緯編と経編

前にも述べたようにニットを大きく分けると緯（よこ）編と経（たて）編がある。

#### (1) 緯編

緯編商品は緯編地から作られ、これはよこ方向に重ねて作った編目を、たてに連結して布状としたもので、糸はおおむねよこ方向に走っている。

緯編には、らせん状に編目を作り筒状の編地を編む丸編と、編目を往復しながら重ねて作りフラットな反物状の編地を編む横編がある。

さらに丸編には肌着、セーター、その他の外衣用に大きな口径の編機で編むもの（通常丸編という）とソックスやストッキング用の口径の小さい編機で編むものがある。

また横編には編む機構の違いによって、柄や組織変化の豊かなバリエーションのできるもの（通常横編という）と、形なりに編む成形編を特徴とするフルファッションがあるが、後者は量的には少なくなっている。

#### (2) 経編

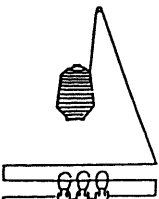

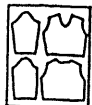
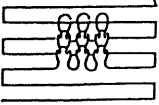

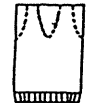

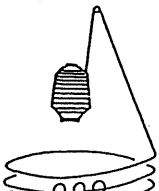

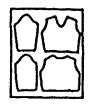

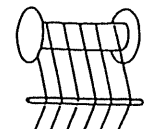


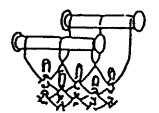
経編はたて方向に重ねて作った編目を、よこに連結して布状としたもので、糸はたて方向（あるいは斜め方向）に走っている。緯編が極端な場合は1本の糸からでも編めるのに対し、経編は少なくともよこの目数だけのたて糸を必要とし、いわゆる整経工程が必要である。

経編には比較的緻密で薄く、ランジェリーや産業資材に使われるトリコットと、やや粗く厚手で外衣やカーテン地に使われるラッシュェルがある。また組織的に糸を斜め交差させて作るミラニーズも経編の一種で、そのしっかりした特徴を生かし外衣に使われるが、現在はきわめて少なくなっている。

### 1-5-2 編地の形態

編地を編まれる形態から分類すると次の3タイプに分けられる。

図表 2-3 ニットの編み方と製品化の方法

		基本の編み方	編地の形態	裁 断	縫 製	特 徴	
ニット	緯 編	平 型 編 機	<ul style="list-style-type: none"> <li>・横編</li> <li>各種横編機</li> </ul> 	 流し編地		ミシン縫製主体 + リンキング	よこ方向に編目（ループ）を連続させ、往復しながら、フラットな反物状の編地を編む。袖口編みから袖編み、裾編みから身頃編みを続けて編み、抜き糸によって着分毎に分離できるようになった garment・レングス編地もある。
			<ul style="list-style-type: none"> <li>・フルファッション</li> <li>フルファッション編機</li> </ul> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>ガーメント・レングス編地</li> </ul> 		リンキング + ミシン縫製	裁断と縫製は、型紙に合わせて完全裁断し、ミシン縫製主体で衿ぐりなど一部をリンキング始末したものや、ガーメント・レングス編地の場合は、一部を裁断し、リンキングとミシン縫製で仕上げるものの2タイプがある。
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・成形編地</li> </ul> (平面状に編む)		原則として裁断はなし 衿ぐり、肩線など裁断するものもある	リンキング主体 (一部ミシン縫製)	各パーツを編目の増減により幅を変えながら指定の形状に編む成形編地、原則としては裁断はせず、リンキングで仕上げるが、価格や編機の種類により、衿ぐりを裁断し、付属編みをリンキング付けするものも多い。又、肩線を裁断して、ミシン縫製するものもある。	
	丸 型 編 機	<ul style="list-style-type: none"> <li>・丸編</li> <li>流し丸編機</li> <li>(ジャージー機)</li> <li>成型丸編機</li> <li>(ガーメント・レングス)</li> </ul> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>流し編地</li> <li>ガーメント・レングス編地</li> </ul> 		ミシン縫製主体 (一部リンキング)	よこ方向に編目を作るが、らせん状に連続させて筒状の編地を編む。	
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・靴下編</li> <li>小丸機</li> </ul> (筒状に編む)			リンキング主体 (一部ミシン縫製)	丸編の中に含まれる場合もあり、口径の小さな専用機で編むもの。	
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・トリコット</li> <li>トリコット編機</li> </ul>				ミシン縫製主体 (一部リンキング)	経編は、たて方向に連ねて作った編目（ループ）を、よこに連結して布状にしたもので、糸はたて方向（又は斜め方向）に走っている（よこの目数だけのたて糸が必要）。編地は流し編地で、織物と同じように型紙どおりに裁断し、ミシン縫製主体で仕上げる。一部リンキングで仕上げる時は、編地によっては裁断面の糸抜けに留意する必要もある。トリコットは比較的緻密で薄くランジェリー向き、ラッシュェルは外衣向き。
経 編	機	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ラッシュェル</li> <li>ラッシュェル編機</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>流し編地</li> </ul>				
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ミラニーズ</li> <li>ミラニーズ編地</li> </ul> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>流し編地</li> </ul>			糸を斜めに交差させて編み、筒状の流し編地が得られる。しっかりした風合の編地が編めるので外衣に使われる。	

① 流し編地（ヤードグッズ）

平面状あるいは筒状に反物のように連続して編んだ編地。肌着用編地を除き広くジャージーといわれている。

② ガーメントレングス編地

袖ゴムから身編部あるいは口ゴム部から袖部を続けて編み、抜き糸によって一着分ごとに分離できるように編んだもの。

③ 成形編地（フルファッション編地）

製品の各パーツを、編目を増減して幅を変えながら、その形状に編んだもの。

1-5-3 ニット商品製作のカテゴリー

ニット商品は、それがつくられる時の状況から、大きく二つのタイプに分けることができる。すなわち、糸から直接編んで商品にするファッション商品と、ジャージーを用いてつくるカット・アンド・ソーン商品の二つである。この二つの商品は生産工程も異なるし、また、できあがりの感じも異なる。なお、これ以外に特にガーメントレングス編地などを用いるカット・アンド・リンク商品といわれるものもある。

図表2-4は制作段階における商品タイプの一覧を示したものである。

次に、図表2-4の項目別に詳しく説明する。

(1) ファッション商品

成形商品といわれるもので、編機としては横編機およびフルファッション編機が用いられる。また、手編みによるものもこの範囲に含まれる。

糸から直接商品にしていくものであり、身頃や袖、または衿などを編む時に、目減らしや目増やしを行ってループの目数を変えながら、目的とする成形編地をつくり、これをリンク縫製を主体として商品に仕上げるタイプである。リンク縫製とはニット特有のものであり、ループとループのかがり縫い方式で、縫目が目立たず美しく、また伸縮性もそこなわない。

目減らしや目増やしをするには、編成中に「目移し」という操作を行うわけであるが、この目移し操作は、ふつう編地の端末からほんの少し内側に入った位置で行われる。その場合、目減らし操作のときはループが二重に重なって、その部分が盛りあがって見えるが、これをファッション・マークといっている。このファッション・マークは、袖ぐりや衿ぐりな

図表2-4 ニットの製作工程の違いと、その特徴

タイプ	編機	内容	特徴
ファッション商品 (成形商品)	横編機 フルファッション編機 家庭機	目減らし、目増やしによる成形編商品 リンク縫製が主体	編成法やリンク手法に技術と手間を必要とするが、裁断箇所が少ないので原料のカットロスが少なく、高級素材にも向いている。セーター類が圧倒的に多いが、ジャケットなどにも応用される。最もニットらしいイメージに仕上がる。
カット アンド ・ ソーン 商品	丸編ジャージー機 経編機 ☆横編流し編	ジャージーの裁断縫製 商品	型紙による裁断で作るので、立体的でファッション的なシルエットの創作が自由にできる。大量生産に向くため安価な商品作りも可能。 ニット特有の伸縮性を考慮しての型紙作りや縫製法の工夫が必要。織物の服に近いイメージに仕上がる。
	丸編ガーメントレングス 横編ガーメントレングス	ガーメントレングス編地の裁断商品で、一部をリンク仕上げ	衿などに横編付属をリンク付けするので、一見ニットライクに仕上がる。生産性が高く幅広いデザインが可能だが、カットロスが多いので高級素材使いには一考を要する。ニットらしさとカット・アンド・ソーンの合理性をミックスさせることができるので多用されている。
	丸編ジャージー機の裁断もの+一部リンクの商品も含まれる。		

どに多く用いられているが、このマークがあることで、成形編の商品であることが証明される。

ファッション商品はセーター類が圧倒的に多いが、ジャケットその他にも応用されている。

ファッション商品は、編成法やリンクン手法にかなりの技術と手間を必要とするが、商品の仕上がりが美しく、また裁断個所がきわめて少ないので、原料のカット・ロスが少ないという大きな利点がある。なお、ファッション商品の場合でも、ふつう衿ぐりはあとから裁断することが多く、別に用意した衿の付属編を本体編地にリンクンづけする。しかし、Vネックなどで衿ぐりの部分もすべて成形編をする完全ファッション商品のものもある。

ファッション商品をつくるに当たっては、まず糸そのものの計画から入るために、さまざまな糸を選んだり、加工したり、また性格の違う糸同士を組み合わせたりして効果をあげることが可能である。

## (2) カット・アンド・ソーン商品

裁断縫製商品といわれるものであり、ジャージーを用いて、これを型紙に合わせて裁断し、それを縫製して仕上げる。カット・アンド・ソーン商品のことを略してC&S商品ともいう。

ジャージーとは、編み流されたニット生地のこと、丸編みジャージー機や経編機によってつくられる。また、横編機の編み流しによってジャージーをつくることもある（なお、ジャージーの意味については、以上のほかに、運動選手などが着用する柔軟性のあるセーター、またはその編地についていうことがある）。

さて、ジャージーのカット・アンド・ソーン商品としては、スーツ、ワンピース、コート類、各種のジャケット類、スカートやパンツ類、およびシャツやブラウス類がある。

カット・アンド・ソーン商品では、裁断個所のほつれをどのように始末するか、またニット特有の伸縮性

を考慮に入れての型紙づくりや縫製法など、ファッション商品とはまた違うむずかしさがある。しかし、ファッション商品と比べると、より立体的なシルエットを得ることができる上、さまざまなファッション的なシルエットの創作がやりやすいという利点もある。

## (3) カット・アンド・リンクン商品

ニット商品は、一般にはファッション商品とカット・アンド・ソーン商品の二つに大きく分けられるが、まれにカット・アンド・リンクン商品という言葉が用いられることがある。これは分類的にはカット・アンド・ソーン商品に入れられるものである。

さて、丸編機には丸編ジャージー機と丸編ガーメントレングス機があり、後者をよく丸編セーターマシンといっている。

カット・アンド・リンクン商品は、この丸編セーターマシンを主体に用いるものであるが、これは裾編から身編へ、また袖口編から袖編へと連続して編成することが可能な編機である。この編機によってつくられた編地を裁断し、これとは別に横編機によってつくられた衿編をリンクン付けしてセーターなどに仕上げるものである。

これは一見して、横編ファッション・セーターと同じようであり、しかも生産性が高いが、カット・ロスが相当に多いために、高級素材を用いるものには向かない。

なおガーメントレングス機というと、丸編セーターマシンのほかに横編機もあるが、これを用いてつくるカット・アンド・リンクン商品もある。

また、カット・アンド・リンクン商品には、以上の意味のほかに、一般ジャージーを用いたドレスなどのカット・アンド・ソーン商品で、随所に横編の付属編を用い、リンクン縫製をするものについても呼称されることがある。